あなたとの距離

あやさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたとの距離

【Ｎコード】
Ｎ７７９７Ｄ

【作者名】
あやさ

【あらすじ】
中学時代、大好きだった先輩を追いかけて同じ高校を受験した、神崎すみれ。１６歳。先輩が中学校卒業する日に、どうしても告白することができずにいたことを、ずっと後悔していたから。高校では、少しでも先輩に近づきたいな…と、希望に胸を膨らませて、先輩と同じ高校での生活をはじめた、すみれ。二人の恋の行方は！？

プロローグ

この小説は
『小説気になろう』
春企画
『はじめての×××。』
参加作品です。

＊この小説は、
携帯での読み易さを考慮して
小まめに改行されています。
ご了承下さい。

第一話　入学（前書き）

ここから連載スタートです

第一話　入学

春、４月。

ドキドキ・ワクワクで迎えた、高校の入学式。

学校に行くために、初めて袖を通す制服。

中学時代のセーラー服は卒業。

白いワイシャツに紺のブレザー。

学年で色が違うネクタイ（一年生は赤）に、膝丈の赤いチェックのスカート。

紺色のハイソックスに、ローファーを履いて行く。

地元出身の現役デザイナーがデザインしたというこの制服も、『かわいい』と巷で評判だった。

全身を鏡に映してみると、
『ちょっと大人っぽい？』
あたしがいる。

制服だけで、ここ数日間だけで、随分大人になった気がする。

高校生。

その響きに『憧れ』ていた。

早く高校生になりたかった。

早く先輩に逢いたかった…。

先輩が通っていると思うだけで、校門をくぐることさえも緊張する。

先輩。

あたし。

先輩を追いかけて、この学校を受験しました。

あたし。

神崎　すみれ。

大好きな先輩と同じ高校に通いたい！

たったそれだけの理由で受験した高校で、本日初めての学校生活スタート♪

ガラガラ。

緊張気味に教室に入る。

先に席についている他の生徒たちのの視線が、一気にあたしに集中した。

「すみれっ！」

「弥生！」

気まずい空気を消し去ったのは、親友の弥生の明るい声。
弥生と同じクラスで、良かったあ。
思わず弥生に抱きついて、再会を喜んだ。
「席について！」
突然現れたクラスの担任は、若いんだか、そうでないのか、ちょっと微妙な女の先生。
先生は、軽く自己紹介した。
担任教科は英語らしい。
「入学式始まるから、出席番号順に廊下に並ぶ！！」
…って、言い方はわりと男らしい？
前後に座っているクラスメイトの顔を確認して、廊下に並ぶ。
改めて見渡してみると周りはやっぱり、知らない顔ばかり。
弥生は中学時代陸上部だったからか、当時のライバルなのか、なんだかもう、仲よさそうに話しをしているコがいる。
それを『うらやましいな』と思いながら、横目で見つつ、列に並んでいると、前のクラスが動き出した。
そうして、入学式は始まった。

先輩が見ている。

そう思うと、変に緊張してしまう。

吹奏楽部の演奏で体育館に入場して、来賓祝辞だとか校長先生や在校生のお祝いの言葉を聞いて、式は無事に終了した。

明日からは、この高校で新しい日常が始まる。

友達はできるかな？
勉強はついていけるかな？

不安はいくつもあるけれど。

一番気になること。
それはやっぱり、先輩との関係。

高校では少しは先輩と、仲良くなりたいな。

話しもしてみたいし…。

夢は膨らむばかり。

第二話　初めての出会い

先輩に初めて出会ったのは、中学一年の運動会。

学年の違う同じ組同士が、同じチームとなり、四チームに別れて点を競い合う。

その日まであたしは、先輩の存在を知らなかったけれど、生き生きしていた先輩は、同じ赤組の中でも特に目立っていた気がする。

日焼けした肌。
光る汗。
眩しい笑顔。

先輩は、とても輝いていたから、運動が苦手なあたしには眩し過ぎるくらいだった。

『がんばろうね♪』

運動会、最後の種目。
色別対抗リレー。

じゃんけんに負けて、出る羽目になってしまったあたし。
あたしから、バトンを受け取るのが先輩。

走りには全然自信がないから、いよいよ訪れた自分の出番に青ざめたあたしに、先輩がかけてくれた言葉がそれだった。

『はい』

小さく頷いて、先輩を見つめた。
目が合うと、先輩はにっこりと微笑んでくれた。
その笑顔に、胸キュンしてしまったあたしは、ドキドキが止まらなくて。

多分、きっと。
いや、間違いなくあの瞬間に。
あたしは先輩に『恋』したんだと思う。
同じクラスの男子からトップで受け取ったバトンを手に、走り出したあたし。

目指す場所は、ただひとつ。
先輩に向かって走る。

あの時ほど夢中になって走ったことはないだろう。今でもそう思えるくらい一生懸命走った。
足取りも軽やかだった。

一歩一歩近づいていくほどに大きくなる先輩の姿に、だんだんと胸を高鳴らせながら、あたしは走る。

縮まってゆく距離。
先輩への想いも募る。

ゆっくりと動き出して差し出した先輩の手の平にバトンを置くと、
それを握りしめた先輩はダッシュ！！。

そして、あたしから離れて行った。

その後ろ姿を目で追いかけながら、心の中で応援する。

どうにか抜かれることなく、トップで先輩に繋げることができたバトン。

トラック半周を全力で走り終えて、胸のドキドキは最高潮だけれど。

ドキドキの理由は、それだけではないことを改めて確認した。

先輩の美しいフォームと、長い手足、輝く笑顔に『恋』してしまったあたしは、先輩の姿だけを見つめていた。

先輩は、二位との差をかなり広げる活躍でトップでバトンを女子に手渡した。

あの運動会の出会いから、あたしは『先輩一筋』に想い続けていた。

その恋は今も、現在進行形だから。

バトンを手渡したあの日のように、あたしはもっと先輩に近づきたいと思っている。

想うだけの、一方通行の恋ではなく、先輩と気持ちを通い合えるような…。

――そんな関係になりたいな。

第三話　ため息

はあ…。
と、思わずついたため息に、『幸せ逃げちゃうよ』と、言いながら、苦笑いを浮かべて弥生が近づいてきた。
窓際の自分の席で頬杖をついて、ため息ばかりのあたし。
あたしの視線の先の、一組の男女の姿を確認したであろう弥生が、『それでか』と短く呟いた。
「まあね。
自分でも諦め悪いなーって、思ってるんだけどさ」
弥生に視線を移して、言葉を返した。
ずっと想い続けていた、大好きな先輩には彼女ができていた。
そのことを知ったのは、入学して一週間経つか経たないかの頃。
中学時代は、サッカー部で活躍していた先輩だから、高校でもサッカー部に所属しているに違いないと、練習を見に行こうとして何気なく向かった玄関で、仲の良さそうな二人に出会ってしまった。
先輩の姿にあたしは思わず緊張して固まってしまったけれど、あたしの存在に気がつくはずもない先輩は、彼女に微笑みながら、彼女と手を取り合い玄関を後にした。
あの日、二人と鉢合わせてからというもの、あたしはため息ばかり。

一歩でもいい。
先輩に近づきたい。
そう願って受験したことさえ、後悔せずにはいられない。
また偶然、二人が一緒にいるところを目撃するのがイヤで、こうして二人が帰るのを確認してから下校するようになった。
中学時代は先輩と一緒にサッカー部に所属し、高校でもサッカー部に入部した、あたしと同じクラスの男子情報によると、先輩は部活を辞めてしまったみたい。
原因は、レギュラーの座を奪われそうになった三年生部員からの『嫌がらせ』。
その時に先輩を支えたのが、当時サッカー部のマネージャーをしていた彼女だったという。
先輩と彼女は一緒に部活を辞めて、今に至るそうだ。
高校生になったら、先輩が所属する部活のマネージャーになろうと決めていたのに…。
先輩と、あたしとを繋ぐ接点は何もなくなったに等しい。
仲良くなれるなんて不可能としか思えない。
はあ…。
また出たため息に、弥生が答えるように呟いた。
「…切ないね…」

夕焼けが眩しい教室は、余計にあたしを切ない気分にさせる。
先輩に好きな人がいるなんて、思いもしなかった。
その人と付き合ってるなんて、考えたこともなかった。

先輩と仲良くなれたら…。
先輩の隣にいられるんじゃないか…なんて。
夢見ていた自分がバカみたいに思えて、情けなくて泣けてくる。
窓辺を照らす夕日を見つめて、あたしも呟いた。

「切ないよね」

二人の姿は、小さくなって消えていった。

第四話　理由

恋は、切ない。

両想いでも、片想いでも。

自分の発言や行動が、相手に嫌われるんじゃないか？…という不安。

自分以外のコと仲良くしているのを目撃するだけで、そのコのことを好きなのかな？…と思ったり。

好きだと意識しない時にはなんでもないようなことが、好きだと自覚した途端に切なくなるんだ。

ゆっくり、そして静かに日が暮れてゆくのに合わせて、教室にも、静寂と薄闇が広がってゆく。

それはまるで…。

太陽という名の先輩を見失った、あたしの『心』…そのものに思えて、

「新しい恋でも捜すかなあ？」

ぽつり、呟いた。

絶望という名の暗闇に落ちたあたしを、光の世界へと導いてくれるものがあるのなら。

それが、新しい恋だというのなら、あたしは差し延べられた腕を掴

むべきなのだろう。

今は素直に、そう思える。

新しい恋のチャンスなら、今まで一度もなかったわけではない。

あたしが『はい』と返事をすれば、彼と呼べる人もできていたはず。

けれども、『好き』と言えないまま卒業してしまった先輩のことを忘れることができなくて、差し延べられた腕を払ってきたのは、あたし自身。

それはすべて、先輩にこの想いを告げることができたなら、先輩の隣にいられるのではないか？…という淡い期待があったから。

告白出来ずにいたことを一年間後悔しながら、先輩への想いを断ち切れずにいたから。

けれども、淡い期待は『彼女』の存在によって絶望的になった。

これ以上想い続けても、苦しいだけ。

…そう、心が訴えている。

今なら、新しい恋へと導いてくれる人がいるのなら、その手を握り返すことが出来そうな気がする。

人はそれを、『逃げる』というかもしれない。

実際、逃げているんだと思う。

想い続けても、決して報われることがない。
想いを伝えても、決して受け止めてもらえない。

『愛するよりも』
『愛されたい』

――その方が、『楽』だから。

辛いだけの恋なら、しない方がいい。

彼女の存在を知った、あの日から、先輩のことを想う度に胸が苦しくなる。

それは、恋の切なさとは違う痛み。

――こんな想いをするくらいなら…。

そう、心が叫んでいる。

――先輩のことを、忘れてしまいたい。

――思い出にしてしまいたい。

と。

あたしの呟きで、余計に静まり返った教室の静寂を破る、弥生の声。

「いいねぇ。新しい恋。あたしも応援する！」

第五話　涙

「だから…」

弥生は言葉を続ける。

「あたしの『新しい恋』も、応援してね？」

と。

――――え？

「…弥生？　…真治は？
ケンカでも、した？」

弥生と真治は同じ小学校で、同じく陸上部員。中学校で同じクラスになったことをきっかけに仲良くなり、付き合い始めたのだった。

中学一年、入学してすぐの席替えで、あたしは真治の隣、後ろが弥生という位置になり、二人と仲良くなった。

夫婦漫才のような二人のやり取りが面白くて、いつも笑っていた気がする。

あれから三年。

ケンカというケンカもしないまま、二人は別々の高校に進学して離れたけれど、

『メールや電話して、ずっとラブラブでいようね！！――って、約束したから、離れても大丈夫！！』

と、自信満々に話していたのは、つい最近のことだよ？

「…別れちゃった…」

夕日を見つめる弥生の横顔からは、その気持ちを読み取ることができない。

二人なら大丈夫。

そう思えるくらい、本当に仲の良かった二人だったから、あたしには信じられなくて、言葉に詰まった。

ただ、夕日に照らされた弥生の横顔だけを見つめていた。

ふっと、あたしに視線を向けた弥生が今にも泣き出しそうな眼で、あたしを見つめる。

「やだなあ…。そんな顔、しないでよ…。
あたしまで、泣きたくなるじゃない…」

声を震わせた弥生の言葉で、あたし自身も泣きそうな表情をしていることに気付く。

「…ごめん…」

思わず出た謝罪の言葉。

「すみれは悪くないよ。
あたしが…。…ずっと黙ってて、……ごめんね？」
涙で潤んだ瞳。
あたしも涙を滲ませて、首を横に振りながら、あたしは答える。『辛かったね』――と。
いつも明るく振る舞っていた弥生からは、その悲しみを想像することも出来なかった。
二人は相変わらずラブラブなんだと思い込んでいた。
あたしの言葉に、堪えていた想いが溢れた弥生はその場にしゃがみ込んで、声を上げて泣き出してしまった。
あたしは慌てて席を立ち、弥生の隣にひざまずくと、いつも弥生がそうしてくれるように、そっと頭を撫でた。
真治が好きだから、ずっと伸ばしていた長い髪。ある日突然、バッサリ切ってショートカットにしてきた弥生。
『長い髪に飽きた』
そう言っていたけれど、もしかしたらあの時に、恋は終わっていたのかも知れない。
全然気付いてあげられなくて、ごめんね。
あたしはもう一度、心の中で呟いた。

第六話　友の想い

恋の終わり。

弥生の姿に自分を重ねて見た。

それはやはり悲しくて、あたしも涙が溢れる。

二人抱き合って、流す涙。

言葉はない。だけど、お互いの気持ちを分かり合える。痛いくらいに。

どれだけの時間が。
どれだけの涙が。
流れただろう？

顔を上げた弥生が呟く。

「あいつ、他に好きなコできたんだって…」

意外だった。

真治は小学校の頃から、ずっと弥生のことを好きだったらしく、どちらかといえば真治の方が好きな気持ちが強かった。

それは誰の目からも明らかで、そんな風に想われている弥生が羨ましかった。

その真治が、弥生以外の人を好きになるなんて。
信じられなかった。

「あたし、『幸せになってね』って言ったんだよ」

『エライでしょ！？』

と、涙目と赤い鼻の弥生は笑ってみせた。

「うん。エライエライ！」

わたしも笑顔を作って、弥生の頭をもう一度撫でた。

「ありがと」

今度は、本当に嬉しそうな弥生の笑顔に、つられてあたしも笑顔になる。

「あたしこそ。いつもありがとう」

友達、っていい。

辛い時には一緒に泣いて。
嬉しい時には一緒に笑って。
家族や彼氏には言えないようなことも相談できる。

その日の太陽を見失っても、次の日も陽はまた昇るから。
友達の存在に支えられて、明日はもっと笑顔の二人でいたい。

「あたしも、すみれの『新しい恋』応援するよ？」

改めて言われると、ドキリとする。
弥生、それって…諦めろ、ってこと？
ずっと、そう思っていたの？
言葉が出ないあたしに、弥生は続けた。
「すみれが諦めるなら、それでもいい。だけど、気持ちを残したまま、無理に諦めて欲しくないよ。
一年間、あたしも後悔してた。卒業式の日、無理にでもすみれの手を引いて先輩のところに連れて行けば良かった、…って」
それは、初めて知る弥生の気持ち。
そんな風に思っていたなんて、全然知らなかった。
「弥生…」
「すみれもずっと後悔していたんだもん。ちゃんと先輩に気持ち伝えて欲しいな」
戸惑うあたしに、
「無理にとは言わないけど。すみれがその気になった時には、あたしも協力するから」
そう、弥生に言われた。
あたしには、言えない。

弥生みたいに、先輩の幸せを願う言葉なんて。
ましてや、自分の想いを伝えることも。

今はまだ、出来そうにない。

第七話　勇気

『告白』

弥生に言われたあの日から、あたしの両肩には、その二文字が重くのしかかっていた。

先輩に気持ちを伝えること。

そこには、前のような夢や希望は何もなくて。

＝『失恋』しかない今なら、それがどれだけ自分自身を傷つける行為か…。

とてもじゃないけど、気持ちを伝えるなんてムリ。できるわけがない。

けれど。

あの日からあたしは、一緒に下校する二人を教室から確認することをやめた。

代わりに、書籍化された携帯小説の単行本を読みふけっていたのだった。

携帯でも小説を読んでいた。

けれど単行本も購入してしまうくらい、大好きな小説。

あたしたちと同じ高校生の女の子が主人公で、彼氏とすれ違いや別れを経験しながらも一途な愛を貫く――といったストーリーで、自分と先輩の姿を重ねて読んだ一冊。

想っても想っても、決して振り向いてくれることのなかった彼氏を、それでも想い続け、気持ちを伝え続けた彼女から、もう一度勇気をもらいたい。

そんな気持ちで、改めて読み返していたのだった。

想いを伝え続け、その度に傷つき涙した彼女だったけれど、結局最後には恋の女神が微笑んだ。

中学時代読んだ時には、想い続けていれば、諦めなければ、恋の女神はあたしにも微笑んでくれるはず、そう思っていた。

先輩に彼女ができているなんて思いもしないで、先輩との恋を夢見ることができた。

本の中の彼女は、彼氏が自分以外の人と付き合っても、諦めることなく想い続けていた。

それは、今のあたしや、弥生の姿と重なる。

彼女はどんな気持ちで、その二人を見ていたのだろう？

彼女はなぜ、それでも彼氏に気持ちを伝えることが出来たのだろう？

決して報われることのない気持ちを抱いて、一途に彼氏だけを思い、彼氏に傷つけられ、涙を流し、それでも『好き』と言える彼女の勇気。

あたしに欠けている、強さ。

その強さが欲しい。

正直、そう思う。

先輩に気持ちを伝えることができたなら、この胸のモヤモヤも晴れる気がするのに、勇気が持てなくて出来ないあたし。

フラれるのが怖くて、傷つきたくなくて、何も言えない弱虫のあたし。

一歩前に踏み出す勇気さえ持てれば、あたしも強くなれるはず。

そう思いたい。

本の中の彼女に、『頑張って』と応援され、背中を押されている気がする。

読み進めていた文字から目を反らし、夕日を見つめた。

重圧をはねのけるように、背伸びをして深呼吸。

パタン。と本を閉じて、あたしはもう一度、自分の気持ちと向かい合った。

第八話　モヤモヤ

季節はもう、春から夏へと移り替わろうとしている。

山の緑も日に日に濃くなって、新緑の季節。

新たに芽吹く命のように、あたしと先輩の恋も進展したらいいのに。

…そう思っていた、春。

ギラギラと照り付ける太陽のように、あたしも先輩と熱い恋がしたい。

…そう思っていた、春。

だけど、恋に敗れた春。

簡単に諦めのつかない恋なら、無理に諦めることない。

ずっと好きでいてもいい。

あの日の弥生の言葉が、あたしに勇気をくれる。

だけど、想うだけ、見つめるだけの恋は、決して相手に届くことはない。

伝えなければ伝わらない、あたしの気持ち。

どうしたらこの気持ちを、胸のモヤモヤを、先輩に伝えることができるだろう…？

前に踏み出す勇気を、弥生は教えてくれた。

「あたし、やっぱり陸上続けることにした」

真治と別れたことを、あたしに告白してから数日。

ずっと部活を休んで、真治と同じ陸上を続けるかどうかで悩んでいた弥生。

続ければ大会などで、出会ってしまう。

もしかしたら、隣には自分以外の女の子がいるかもしれない。

そういうのを見るくらいなら、陸上を辞めた方がいいのかも…と、弥生は悩んでいた。

ずっと難しい顔をしていた弥生だったけど、今日は笑顔。

その表情から、決意のようなものも感じられる。

「いいの？」

だけど、素直に喜べないあたしは問い返す。

彼女と一緒にいる所を目撃するのは、結構辛いから。

「うん。平気。

あたし、やっぱり走るの好きだから」

弥生は真治への想いを、走ることで忘れようとしているのかもしれない。

でなければ、走ることそのものが真治へのメッセージなのかもしれない。

自分が一番輝けるもので、もう大丈夫と、伝えたいのかもしれない。

真治と同じ陸上を続けること、それは、弥生が前に向かって歩き出そうとしている証だから。

「そっか。

…じゃあ、頑張ってね。」

あたしも、笑顔でそう答えた。

「うん。

今から、部活行ってくるね！」

カバンを手に、足取りも軽く弥生は教室を出て行く。

その後ろ姿を見つめて思う。

あたしには、何があるだろう？

夢中になれるもの。

「頑張って！！」

迷いを吹き飛ばして、走り出した弥生に向かって。

自分の心にも問い掛けるように、ひとり呟いた。

あたしも、うじうじ悩んでいてもしかたないんだよね。

――前に、進まなきゃ…。

第九話　決意

前に進みたい。

だけど何も前進できないまま過ごす、放課後の教室。

再び読み始めた愛読書も、エンディングに向かって最高潮に盛り上がってるところ。

結末は知っているとはいえ、やっぱりドキドキする告白シーン。

何度も当たって砕けているのに、決して諦めない強い心。

あたしも見習いたいな、…などと本の世界に没頭していた、あたしの元へ。

――ガラガラッ。

勢いよく教室の扉を開けて、駆け込んで来る人影。

夢中になって読んでいたあたしは、びっくりして思わず肩をすくめてしまう。

そして、怖ず怖ずと顔を上げると、よほど急いで来たであろう肩で息をしている弥生の姿があった。

「…なぁんだ。

びっくりさせないでよ…」

安心して、ホッとするあたしに向かって弥生は興奮気味に話し出した。

「それどころじゃないよ！」

「さっき部活の先輩から聞いたんだけどね…」

「先輩、別れたらしいよ！！」

「え？」

あんなに、仲良さそうだったのに？

弥生の言葉が信じられない。

「ほんとに？」

問い返したあたしに、弥生は頷きながら、

「理由はわからないけど、二、三日前に別れたらしい、って」

「先輩と同じクラスだし、間違いないよ」

と言う。

偶然あたしが目撃した、あの日の二人からは想像もつかない。

「どうする？

すみれ？」

瞳をキラキラと輝かせて、弥生は問う。

「告白したい！！」

思うより先に、言葉が出ていた。

『告白』

言葉にして初めて、妙な緊張感を覚える。

胸がドキドキして、全身が一気に熱くなる。

これは、あたしが前に進むために与えられたチャンス。

これを逃したら、もう二度ときっかけを掴むことができないかもしれない。

そう思うと、告白するなら今しかない。

自然と、そう思えた。

あたしの返事に満足気な表情を浮かべて、

「あたしに任せて！」

そう言った弥生と、告白大作戦計画を練り上げる。

決行は明日。

放課後の屋上で。

計画は完璧。

後は、あたしの頑張り次第。

先輩に、中学時代から抱いてきたこの想いを、なんとかして伝えたい。

だけど、なんと言って伝えればいいだろう…??

頭を悩ませ、眠れない夜を過ごす。

たくさんの文字が宙を舞い。

頭の中も駆け巡る。

気持ちがもう、明日に向かってソワソワしてしまう。

高校生活、初めての。

人生、初めての。

『愛の告白』

ついに、胸のモヤモヤを晴らす時が来た。

第十話　告白

街をオレンジに染めた、夕暮れ時の風景。

それを校舎の屋上から眺めている、あたし。

だけど、心ここにあらず。

あたしは、もうすぐやってくる先輩のことで頭がいっぱい。

心臓は飛び出しそうなくらい、ドキドキしてる。

自分の鼓動を手の平で感じながら、深呼吸を何度も繰り返す。

目を閉じて、先輩に向ける言葉をシュミレーション。

あの日、先輩の隣で微笑んでいた彼女の笑顔を自分にすり替えて、いいイメージを膨らませてみた。

自然と、顔がにやけてしまう。

それが現実になったら、すごく嬉しいのに…。

ガチャリ。

扉の開く音で、妄想の世界から現実に引き戻された。

現れたのは、長身のスラリとした体型の男の人。

遠くからでもわかる、愛しい先輩の姿。
一瞬にして、全身に緊張が走る。
来たっ！！
一歩一歩、あたしも先輩に近づく。
「俺のこと呼び出したの…って、君？」
初めて聞く、先輩の声。
怒ってる？？
「はいっ。
一年C組の　神崎すみれ　です」
ペコリ。
思わず頭を下げてしまった…。
ヤバイ。
どうしよう…。
頭上げてもいいのかな？
悩んでいると、
「ちょうど帰るところだったから、気にしないで」

意外にも優しい声に、恐る恐る頭を上げる。
優しい笑みを浮かべて、先輩がそこにいる。
ただそれだけで、胸のドキドキは鳴りやまない。
「君、…同じ中学の？」
思ってもみなかった、先輩からの意外な言葉。
あたしのこと、知ってる？
先輩が！？
想うだけの、一方通行な片思いだと思っていた。
だけど先輩は、あたしの存在を知っていた。
ただそれだけで、嬉しい。
「はいっ！
中学の時から、ずっと先輩のことが好きでした！」
ペコリ。
嬉しさのあまり、また頭を下げてしまった。
『付き合って下さい』

そう、続けたかった言葉を飲み込んでしまう。

また、頭を上げるタイミングに困っていると、

「ありがとう」

頭上から、先輩の声。

「俺のこと、そんな風に思ってくれる人がいることは、今の俺には救いになるよ」

先輩の声はどこか悲しげで、あたしは慌てて頭を上げて先輩を見つめた。

目と目が合う。

先輩の瞳は、泣いているようにも見えた。

「だけど、ゴメン。

君の気持ちには応えられない」

深々と頭を下げて、先輩は屋上を出て行く。

夕暮れ時の冷たい風が、あたしの頬を撫でた。

そう、あたしは先輩にフラれてしまった。

最終話　笑顔

先輩の背中は、どこか寂しそうで、いつもより小さく見える。

先輩自身あまり多くは語らないけれど、背中が全てを物語っている。

『まだ彼女が好き』

口に出さなくても、分かってしまう先輩の気持ち。

大好きな先輩のことだから、背中で全てを理解できてしまうんだよね。

「先輩っ！！」

屋上を出て行こうとする、哀愁が漂う先輩の背中に、あたしは思わず叫んでしまった。

何か一言、言いたくて。

少しでも元気になって欲しくて。

ピタリ。

立ち止まる背中。

だけど決して、振り返りはしない。

その背中が、泣いているようにも感じる。

「あたし、ずっと先輩のこと、大好きでした！
彼女がいても…、ずっとずっと大好きでした！！」
絶対に振り返らない背中に、あたしはもう一度頭を下げた。
……。
しばらくの沈黙の後。
「ありがとう」
の声に、あたしは頭を上げた。
と、右手を小さく上げて、あたしに微笑みかけ、別れのあいさつをしてくれていた先輩の姿があった。
優しい先輩の微笑みは、やっぱりどこか寂しそうで、あたしはなんだか悔しくなる。
それでも、振り向いてくれたことが嬉しくて。
「ありがとうございました」
頭を下げると、じわっと涙があふれた。
先輩にフラれちゃった…。
それは、告白する前から分かっていたこと。

だけど。

もしかして…という期待もあった。

『先輩の彼女』

「なりたかったな…」

ひとりつぶやくと、涙があふれて止まらない。

ずっと想い続けていた、大好きな人。

近づきたくて、距離を縮めたくて、仲良くなりたくて…。

一大決心をして、告白したのに。

見事に玉砕してしまった。

あたしはきっと、これからも、先輩の背中を追い掛けることしかできないんだ…。

いつか見た、先輩と彼女。

二人のように、肩を並べて歩くことも、出来ないんだよね。

唇を噛み締めた。

両手には握りこぶし。

遠ざかっていく先輩の後ろ姿。

見つめることしかできない。
広がり続ける、先輩との距離。
追いかけたくても、追いつけない。
悲しいけれど、それが現実。
涙している先輩を励ますことも、慰めることもできない。
彼女を忘れさせることさえも。
悔しいけれど、それが現実――。
頬を伝う涙を拭い、あたしは微笑む。
その笑顔は、きっとぎこちない。
けれどいつか本当に、笑える日が来ることを願って。
あたしは屋上を照らす夕日に向かって、もう一度微笑んだ。

【ＥＮＤ】

最終話　笑顔（後書き）

今まで、『あなたとの距離』を読んでくれた読者の皆様、本当にありがとうございます。作品はどうにか完結いたしました。　仕事が忙しくて、更新もなかなか出来ず、企画宣伝もままならず、企画管理人様、企画作家の皆様には大変ご迷惑をおかけしたことと思います。　この場を借りてお詫びすると共に、企画に参加できたことに感謝しております。　本当にありがとうございました。　［２００８．５／１８　作者　あやさより］

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7797d/

あなたとの距離

2010年10月17日03時32分発行